

フィリピン武術「アーニス」の実践と歴史の記憶 —身体技法と歴史言説の関連性を巡る考察—

大久保豊*

はじめに

本論では、「アーニス (Arnis)」と呼ばれるフィリピンの武術を主な題材に採り上げている¹⁾。アーニスの特徴は両手に持った短い棒状の武具を自在に操る技法にあり、日本の「棒の手」と呼ばれる武術にやや類似している。伝承や諸説が伝えるところによると、この武術は16世紀のスペイン到来以前からフィリピン各地に存在しており、スペイン、アメリカ、そして短期間ながら日本による400年近く続いた植民地期でも途絶えることなく受け継がれてきたと言われている。そして近年では、護身術あるいは身体育成を目的としたアマチュアスポーツとして、幅広い層の人々がアーニスを学んでいる。さらにアーニスをフィリピンの伝統文化の一つとして評価しようとする動きも観察できる。

アーニスを初めて見る人は、その独特の動きに目を見張るだろう。両手に持った棒を操る動きは、目にも止まらぬ素早く複雑でありながら、どこか優美さを備えている。それでいて、対戦する相手に対しては、容赦ない打撃を与える。美しさと破壊力の両方を兼ね備えたこの武術がどのように形作られ、どのような人々が担い手となっているのか。本論で明らかにしたい問題はこの2つに集約することができる。

序論

本論の目的

本論の目的は、フィリピンの歴史的状況を踏まえて、アーニスがどのように継承されてきたのか、そして現代においてどのような形で修練や実践が行われているのか、さらにアーニスを実践している人々は果たしてどのような意識をこの武術に抱いているのかを明らかにすることにある。

後に述べるように、「伝統武術」としてのアーニスの文化像は、確固たる歴史的史料に基づいていると言うよりも、伝承などに強く依存して形作られていると言える。だがこうした歴史的な語りは、実際の技法と結び付けて語られることで、より真実味が加わっている。そこで本論では、フィリピンの歴史とアーニスの実践のあり方との間にどのような関連性があるのかを、文献などの資料と、筆者自身がアーニスの修練に励む人々から得た情報に基づいて考察し、明らかにしていく。

以上の課題に取り組むための手がかりとなるのは、人類学で用いる「伝統」の概念である。

*広島大学大学院 総合科学研究科

ここで言う「伝統」とは、その真実性や正統性が客観的に判定することが可能な実体性のある概念を想定しているのではなく、様々な状況や関係性の中で、構築されていく概念として捉えている。

アーニスという武術は、日本ではこれまでほとんど先行研究が存在しなかった。だが、フィリピンの伝統文化のあり方を解明する上で、この武術は非常に貴重な知見を提供しうる題材であると考えられる。本論の考察が、人類学、比較民俗学を問わず、ささやかでも何らかの学問的な貢献を果たすことが出来れば幸いである。

本論の構成

本論を構成しているのは、序論を含めて6つの章である。序論となる本章では、本論の背景や目的、全体の構成を明らかにする。第Ⅱ章では、本論で扱う「伝統」概念の枠組みを明らかにするために、近年の文化人類学における「伝統」概念に関する議論を検討する。第Ⅲ章では、主にアーニスの技法的な側面を扱い、この武術の特徴を示す。そして第Ⅳ章ではアーニスの歴史的側面、第Ⅴ章で現代の状況について筆者による分析と考察を加える。最後に結論部で、これまでの議論のまとめと今後の検討課題を明らかにする。

第Ⅱ章 文化人類学における「伝統」概念に関する議論

それでは、本論で用いる「伝統」という概念について、主に文化人類学の観点から整理しておくことにしよう。この考察を通じて、本論では「伝統」という概念を、様々な文脈や関係性の中で用いられる、客体化された概念として捉えていることを示したい。

人類学において長らく「伝統 (tradition)」とは、前近代にその起源を持つ概念を指し示していた。さらに伝統を、近代的な「西洋」社会とは異なった時間で生きる非西洋社会の人々や文化を示す概念として用いることで、近代社会と伝統的かつ前近代的な「非西洋社会」の対比が強調された。

サイード (E. W. SAID) はこうした近代社会と伝統社会とを二分して捉える思考様式に対して、西洋を「能動的・自律的・理性的・自制的」、非西洋 (東洋) を「受動的・依存的・非理性的・官能的」と規定した上で、前者が他者を一方的に支配し、再構成し、威圧することを正当化する思考であるとして厳しく批判した (サイード 1986)。彼の指摘した問題は、非西洋社会の人々をただ「他者」と規定したところにあるのではなく、こうした人々を創造的に文化を作り出すことが出来ない、近代とは別の時間を生きる存在として見なしたことにある (太田 2001: 130)。

こうした「オリエンタリズム」批判の中で、「近代」と対置する形で無条件に用いられてきた「伝統」概念も再検討を迫られることになった。ホブズボウム (E. HOBSBAWM) とレンジャー (T. RENGER) は『創られた伝統』(ホブズボウム&レンジャー 1992) において、「伝統」とは従来考えられてきたような固定的な概念ではなく、政治的な動きの中で創造されうるとする認識を示し、大きな議論を呼び起こした¹⁾。ホブズボウムとレンジャーと同様の視点に立ち、キージ

ング (R. M. KEESING) とトンキンソン (R. TONKINSON) は、メラネシアで広く用いられる、伝統や慣習などを指し示すカストム (kastom) が、政治的な動きの中で創造され、用いられているとする、いわゆる「カストム論」を展開した (KEESING and TONKINSON 1982)。

だが、真正な伝統と、新たに創造された非真正な伝統という区分は、その伝統の中に生きる人々、特にエリート側の人々から強い批判を受けることになった。キージングとハワイの先住民運動の活動家トラスク (H. TRASK) との間で行われた論争 (KEESING 1989, TRASK 1991) は、まさに「伝統」の創造性と、その伝統を語る権利が誰にあるのかを争点としていた。キージングは、メラネシアで用いられる伝統概念を、先住民である人々が、西洋人との対比を際立たせるという政治的意図の元に作り出した構築物であると主張した。一方トラスクは、キージングの主張はまさしく「自らの所属していないところへと侵入していく不作法な白人」の主張に他ならない、と痛烈に批判した。

トラスクの議論は、極論すれば現地の本質を知るものは現地の人々しかいないとする立場であり、あまりにも「現地」と「外部」との断絶を強調しすぎている、と批判することも可能であろう (INOUE 2000)。しかし一方で、彼女の指摘は、公平を装った人類学者の視点や記述が孕む権威主義的な側面を浮き彫りにした。つまり、現地の人々が持つ伝統的価値観に対して、人類学者が「公平な視点」を装って、この文化なり価値観は本物である、あるいは後から創り上げられたものであるなどと、区別する権利が果たしてあるのか、という問題を突きつけたのである。

こうした批判を受けて、人類学の議論は、植民地統治や国民国家形成過程における伝統や文化を巡る語りから、その背後に存在する政治権力や力関係を議論の焦点にすることで対処した。つまり、「文化」をそれまでの実体のある存在から、政治・権力関係の中で象徴として客体化され、操作される対象物とみなすことで、文化を語る主体と権利の問題を回避したのである (吉岡 2005: p233)。

こうした人類学の姿勢を、政治的問題からの「逃げ」と捉えるかどうかは微妙だが、さりとて再び現代とは異なった時間軸や次元に押し込めてしまう意味で「伝統」という概念を用いることは避けねばなるまい。そこで本論では、筆者が審判役として「伝統」の正統性や信憑性を断定するのではなく、人々が「伝統」を主張する背景にはどのような状況が存在するのか、そして主張に際してどのような方法を用いているのか、あるいはどのような事物や象徴を動員するのか、さらにその意味は何か、といった文脈を描き出すことに注力することにする。

第Ⅲ章 フィリピン武術アーニスの技法的特徴

次に本章では、「果たしてアーニスとは何なのか?」という問題に取り組むことにしよう。本章の前半部では、この武術の技法について検討し、後半部ではアーニスの諸団体が採用する階級制 (ranking system) を手がかりとして、組織構造の特徴の一端を示す。これらの分析と考察を通じて、アーニスの特徴を示したい。

1. 武具、技法から見たアーニスの特徴

「アーニス」とはフィリピンで発達した武術全般を指し示す呼称として用いられる。ところが団体毎に微妙に修練の内容が異なっている上に標準的な規則や基準が定まっていないために、「これがアーニスだ」と一言でこの武術を定義することは非常に難しい。

しかし、いくつかの具体例を提示することで、臆気ながらも何らかの傾向や特徴を見いだすことは可能だと考える。そこで次頁に、アーニスの修練体系の一例を示した。この表は、イノサント・アカデミーという実践団体で行っているアーニスの技法体系を段階毎にまとめたものであるⁱⁱⁱ⁾。この表を一読していただくと、いかにアーニスの武具が多種であり、かつ多様な技法を備えているかが分かるだろう（表3-1）。

次にこの表を、武具と技法の観点から整理してみたい。体系に含まれている武具では、スティック（棒）、ソード（剣）はもちろん弓矢やさらにはポータブルキヤノンまで多岐にわたっている。また技法の面では片手に持った棒を操るものから、果ては道ばたの砂や泥を投げつけるという方法までも含んでいる^{iv)}。

武具では、主に1. 棒 (stick)、2. 剣 (sword)、3. 斧 (ax)、4. 短剣 (dagger)、5. 棍 (toyok) などが挙げられる。棒 (stick) の呼称は実戦団体によって異なるが、一般的には「バストーン (Baston)」という名称が最も普及しているようである。バストンの外観は全長70cm程の簡素な棒である^{v)}。多くの流派の修練では安全で軽い籐製のバストーンを用いるが、修練によっては、堅い木製のバストーンを用いることがある。このバストーンを、両手あるいは片手で操って攻撃、あるいは防御を行うのである。このことからアーニスは、基本的には何らかの武具を用いた武器術であると言える^{vi)}。

剣 (sword) は、刀身の長さによって大きく長剣 (ザンジバル・Zanzibar) と、剣 (ギヌンティン・Ginunting) に分けることができる。細い片刃の刀身である場合が多いが、両刃の剣やフィリピンでは護身用の武具として長い歴史を持つ、幅の広い刀身を備えた山刀 (ボロ・Bolo)、そして短刀 (ダガー・Daga) などいくつもの種類がある。もちろん、修練の際は殺傷能力のある実際の武器ではなく、これらの剣の形状を模した武具を用いる。

技法は、大きく分けて1. 片手に持ったスティック等の武具を操る技法、2. 両手に持った2つの武具を操る技法、そして3. 相手を組み伏せる体術、を主なものとして挙げることが出来る。片手に持った武具を操る基本的な技法から、2つの武具の操作、さらには異なった種類の武具を同時に操る高度な技法へと段階を経るに従って、技法はより複雑なものとなる。

こうした直接的な技法だけではなく、最終段階となる第12エリアでは、メンタル (精神修養) やフィロソフィー (哲学) といった、戦いにおける精神状態や心構えを学ぶ。技を磨くだけではなく、精神を鍛えてこそ技法の習得が完全なものとなる、というわけである。

第1エリア	第8エリア
シングル・スティック、シングル・ソード(剣)、シングル・アックス(斧)、シングル・ケイン(杖)	スタッフ(長棒)、オール(櫂)、パドル(櫂)、スピア(やり)、スピア&サーキュラーシールド(円形盾)、スピア&レクタングュラーシールド(長方形盾)、スピア&ソード/スティック、スピア&ダガー、トゥーハンド・メソッド(ヘビースティック)、トゥーハンド・メソッド(スティック)
第2エリア	第9エリア
ダブル・スティック、ダブル・ソード、ダブル・アックス	サロン/マロン(腰布)、ベルト/ウィップ(むち)、ロープ、チェーン、スカーフ/ヘッドバンド、ハンカチーフ、オリシトヨク(双節異棍)、タバクトヨク(双節棍)、ヨーヨー、タバクルビド(双節釘棍)、ステイングレイテール(えい尾)
第3エリア	第10エリア
スティック&ダガー(短剣)、ケイン&ダガー、ソード&ダガー、ソード&シールド(盾)、ロング&ショート・スティック	ハンド・スローイング・ウエポンズ、スピア&ダガー、ウッデンスプリンター(ナイフ状木片)、スパイク(長釘)、コイン、ワッシャー(座鉄)、ストーン、ロック、サンド(砂)、マッド(泥)、ダート(不潔物)、ペッパー(胡椒)、パウダー等
第4エリア	第11エリア
ダブル・ダガー、ダブル・ショート・スティック	フロジェクトイル・ウエポンズ、ボウ&アロウ(弓矢)、ブローガン(吹き矢)、スリングショット(バチンコ)、ポータブルキャノン(軽便砲)
第5エリア	第12エリア
シングル・ダガー、シングル・ショート・スティック	メンタル、エモーショナル、スピリチュアルトレーニング、ヒーリングアーツ、ヘルススキル、リズム/ダンス、ヒストリー、フィロソフィー、エスイクス
第6エリア	
パーム・スティック(手尺棒)、ダブルエンド・ダガー	
第7エリア	
パナトウカン(ボクシング)、パナジャカン、シカラン(キッキング)、ドウモッグ、ラヤッグ、ブノ、デッチョン(グラップリング)、アンカブ(かみつき)、パクシー(つねる)、ヒゴット・ハンパック(受け打ち)、フバッド・ハンパック(ほどき打ち)、ルバック・ハンパック(受けほどき打ち)	

表3-1 アーニスの技法体系の一例(イノサント・アカデミー)

(『月刊秘伝』2005年4月号(株)BABジャパン p44より)

次に、「モダン・アーニス (Modern Arnis)」と呼ばれる体系を例に取り上げて実際の修練の一例を示そう。「モダン・アーニス」とは1960年代後半に、レミー・プレサス (R. A. PRESAS) というアーニスの指導者の一人が考案したアーニスの技法の名称であるⁱⁱⁱ⁾。この技法を採り上げる主な理由は、モダン・アーニスが、従来は戦いの技術であったアーニスをスポーツとして普及することを意図して、さまざまな技法を総合的に取り入れ、体系化した技法であることが挙げられる。この点に於いては、あくまでも格闘技術の習得に重点をおく前述のイノサント・アカデミーとは方向性がやや異なる。現在のフィリピンでは、多くの大学のスポーツクラブや、公立学校の体育授業の教材としてこのモダン・アーニスの技法を採用しており、一般的な修練の方法を把握するには最適であると言える。

2. アーニスの修練 (モダン・アーニスの場合)

a. 基本動作

修練におけるモダン・アーニスの最も基本的な動作は、一本のバストン (棒) を用いた、対戦者の急所を攻撃することを前提とした12の動きである。即ち、修練者は対戦者のこめかみ (左右両側)、胴部 (左右両側)、みぞおち、胸部 (左右両側)、大腿部 (左右)、眼 (左右)、額の各急所をバストンで打つ、あるいは突く動作を反復練習する。修練は一人で行うこともあれば、攻撃の部位を確認するために別の修練者と向かい合っただけの形式で行う場合もある。基本的に右手に持ったバストンを用いるが、もちろん左手に持ち替えての修練も可能であり、その場合は右手の動きを左右反転させた動きとなる (PRESAS 1983: p31~43)。モダン・アーニスを学び始めた修練者は、この12の動作を繰り返し練習して、突き、払い、打ち下ろしなどバストンの基本的な扱い方を会得する。

一方下半身の動きに関してはそれほど厳格な規則が定められている訳ではない。基本的な立ち姿勢は、右足を身体の前方に置き、かかとを少し浮かせるようにして、右足の前方に重心が来るように立つとともに、左足は身体やや後方に軽くつま先が地面に触れるようにして置く、というものである。そして両足の間隔は自然に歩行する時の歩幅を取る。つまり、日常生活でおこなう歩行の姿勢に極めて近いものである。これは日本の空手の型のように大きく両足を前後させ、十分に腰を落とすという姿勢とは大きく異なっている。こうしたアーニスの足の基本姿勢は、一つには日常的な生活の中でも即座に技を繰り出だすことを想定して、通常の歩行姿勢とそれほど違いのない姿勢を維持するためであり、そしてもう一つには右足に重点を置き、歩幅を狭く取ることで、前後左右に移動する足の運用を効率良く、素早く行うため、という主に2つの理由がある。

b. 二人の修練者による修練

さて、基本的な動作を習得すると、次は別の修練者と二人一組での修練の段階に移行する。この段階では、前述した12の基本動作を、攻め手となる修練者が繰り返し出し、一方受け手となる修

練者が素手、またはバトンで受け流す。この一連の動作を繰り返し行うのである。この修練を通じて、バトンの繰り出し方法を会得すると共に、攻撃に対する防御方法を学習する (PRESAS 1983: p83~93)。

この二人一組の修練は、アーニスの大きな特徴であるflaw practiceと呼ばれる、流れるような連続した動きとして行う。修練者の立ち位置を固定している場合もあるが、技を繰り出しながら二人が均等な距離と対面位置を保ったまま大きな円を描くように動く場合もある。こうした動きは紛れもなく武術の修練として理解できるものではあるが、そこには何らかの審美的な要素が認められる。アーニスに特徴的な舞踏的な身体技法が、攻撃と防御を素早く、流れるように行う動きに基づいていることが、この修練から理解することが出来る (図3-1)。

c. シナワリ (Sinawali) とレドンダ (Redonda)

それでは、アーニスの技法上の特徴である、連続かつ流れるような動作を示す具体的な例として、2つの技法を紹介しよう。それはシナワリ (Sinawali) とレドンダ (Redonda) という技法である (PRESAS 1974: p127~131, 1983: p95~117)。

まず、シナワリについて説明しよう。これは二人の修練者が両手にバトンを持った状態で正対して行う。そして相手のこめかみ目がけて (上段に) 水平に振りだした右手のバトンを、もう一方の修練者が同様に右手のバトンで受ける。次に相手の膝に向けて (下段に) 打ち下ろした左手のバトンを、対戦者がバトンの軌道上で受け止める。このように上段あるいは下段からのバトンの動きを連続して打ち合う。



図3-1 モダン・アーニスの修練 (Arnis Association International Incorporated)

次にレドンダについて説明する。これは相手が下段に構えた両手のバストンの一方に対して、両手に持ったバストンを三回連続して当てるというものであり、相手のバストンに確実に自らのバストンを当てることが目的である。その際、受け手の修練者はバストンを動かすことなく静止している。そして右に三回当てた後は左を三回と、左右交互に修練を行う。打ち下ろしたバストンは、すぐに次の攻撃に備えて頭部の側方、あるいは脇の下に構えるため、途切れることなく連続した攻撃が可能となる。

3. 階級制 (ranking system) から見る組織的構造

こうした技法的な特徴を持ったアーニスを、どのような人々や集団がどのような構造の元で修練しているのだろうか。

現在見られるような、トレーニング・ジムや屋外の広場などで、少数の指導役の修練者が、生徒となる多数の修練者に技を指導する方式は、比較的近年になって成立したものである。現在確認されている最も古い実践団体でも、1920年にセブ市で組織されたラバンコン・フェンシング・アソシエーション (Labangon Fencing Association) である (GODHANIA 2001: P53)。

では、それ以前の時代には、修練者はアーニスはどうに受け継いできたのだろうか。植民地期以前には、人々が護身の技として、あるいは貴族などの社会的地位の高い人々は嗜みとしてこの技の修練に励んでいたという (PRESAS 1974: P11)。だが、フィリピンの長い植民地期の間に、植民政府が民衆の反乱を防ぐ目的で武器の保有や武術の修練が禁じられたことから、表立って修練することが不可能となった。そのためアーニスを修練する人々は、ごく身近な人々の間で個人指導 (private instruction) という形式で密かに受け継いできたという。当時のアーニスの修練形態は、一人の指導者が一人の門下生に実戦形式で技を指導し、特に位階制などで修練者の段階を区別することはなかったという。こうした古典的な修練方法を家族的技法 (a family art) と形容する修練者もいる (DIEGO 2002:3)。

これに対して、現代のアーニスでは、グランドマスター (Grandmaster: 最高師範)、マスター (Master: 師範) あるいはグロ (Guro: 教師) といった指導者に対する呼称を用いたり、習熟度に応じた段階制を設けている^{ix)}。

先に挙げたモダン・アーニスを例に取ってみよう。モダン・アーニスでは様々な武道・武術の要素を積極的に取り入れているため、帯の色に応じた階級の区別や、段 (dan) といった呼称の採用など、外来武道の影響が色濃く見られる (表3-2)。

なお、こうした階級は、全ての実践団体が統一した制度を共有しているわけではなく、団体によって微妙な差異が存在する。実践団体の一例として、Bahud Zu' Bu という団体の階級を示す (表3-3)^{x)}。

以上、本章では技法上の特徴と、団体の組織的な構造から、フィリピン武術アーニスの概要について説明した。アーニスは様々な武具を用いる武器術であると同時に、“流れ (flow)” と

帯の色	階名 (男性)	段階名 (女性)
White	Likas	Likas
Brown	Likha	Likha
1st	Isa	Isa
2nd	Dalawa	Dalawa
3rd	Tatlo	Tatlo
Black	Lakan	Dayang
1st Dan	Isa	Isa
2nd Dan	Dalawa	Dalawa
3rd Dan	Tatlo	Tatlo
4th Dan	Apat	Apat
5th Dan	Lima	Lima
6th Dan	Anim	Anim
7th Dan	Pito	Pito
8th Dan	Walo	Walo
9th Dan	Siyam	Siyam
10th Dan	Sampu	Sampu

表 3 - 2 モダン・アーニスの階級制
(PRESAS 1974: p159)

段階	段階名 (英語表記)	段階名 (フィリピン語表記)
1.	basic students	mag-aaral
2.	intermediate	mananandata
3.	advance	mandirigma
4.	assist instructor	munting guro
5.	instructor	guro
6.	instructor II	bihasang guro
7.	instructor III	dalubhasang guro
8.	instructor IV	punong guro
9.	master	master

表 3 - 3 Bahud Zu'bu の階級制

“攻撃と防御の組み合わせ (weave)” を基調とした (PRESAS 1983: p4 ~ 5) 独特の動作を兼ね備えた武術として捉えることが出来る。そして近年では、実践団体としての組織化が進み、階級制などの導入が行われている。

このようにアーニスは、時代に応じて様々な技法を取り込んだり、その体系を変化させている。その一方でフィリピンの人々やこの武術を修練する者の多くは、アーニスをフィリピンでの伝統的な武術と考えている。それでは、こうした「伝統」は一体何を根拠としているのだろうか。次章では、アーニスの歴史的な側面について考察する。

第IV章 フィリピンの歴史とアーニスの発祥・継承史

本章では、フィリピンの歴史とアーニスの発祥や継承の歴史がどのように関連しているのかを見ていくことにする。この考察の目的は、フィリピンの人々、とりわけアーニスの修練に携わる人々がアーニスに見いだす「伝統性」という価値観の根拠を探ることにある。そこで本章

は、1. スペイン到来以前のいわゆる先スペイン期 (pre-Spanish era)、2. スペイン植民地期、3. フィリピン革命前後、と19世紀までのフィリピンの歴史を大きく3つに分け、各時代毎にフィリピンの史実を説明した上で、アーニスの発祥や継承の歴史について検討を加える。

1. 先スペイン期 (pre-Spanish era) のフィリピンの状況とアーニスの発祥 先スペイン期のフィリピン社会

現在のフィリピン史は、1521年以降フィリピンに来航したスペインの宣教師や植民地行政官、軍人、旅行者などの記述に頼ったものが多い。そのため、近年に至るまでヨーロッパの側から見た一面的なフィリピンの姿が、正しいフィリピン史とされてきた。それに加えて、植民地期にスペイン側が行ったフィリピンの歴史的史料や文化的構築物の破壊や遺棄は、スペイン到来以前のフィリピンでは人々がどのような生活を営んでいたのかを推測することを著しく困難なものとした。しかし、近年の「ラグナ銅板」^{xi)}などの貴重な歴史的史料の発見や、周辺の東南アジア地域との関係から、当時の人々の生活環境や文化的状況を推察することは可能である。

今日フィリピンと呼ばれる地域には、16世紀以前には中央集権的な統一国家が存在せず、各地にバランガイ (barangay) と呼ばれる30世帯から100世帯が構成する小規模な村落が点在していた。バランガイは社会階層が存在する社会で、最上層の王族 (ダトゥ)、貴族 (マハルリカ)、一般民、そして最下層の隷属民の大きく4つの階層から成っている。人々はバトゥハーラと呼ぶ神がこの世を創造したと信じ、木、川、感覚など、この世の全ての現象にはそれ自体のアニト (精霊) が宿っているというアニミズム的な宗教を信仰していた (ホアキン 2005: p35)。そして文字の記録は、アリバタ (alibata) と呼ばれる表記体系を用いていた。敵対するバランガイや侵攻してきた敵対勢力と戦闘状態に陥った際に人々が用いた主な武器は、刀身が波形のようにねった剣 (クリス・kris) や槍、そして大砲であった (図4-1)。戦士達はこれらの武器と盾で身を固めたのである。

現在のフィリピン共和国の首都マニラは、当時から7世紀から14世紀頃に東南アジアで強大な勢力を誇っていたシュリーヴィジャヤ国 (Shri-Visayan、室利仏逝国) など、東南アジア各地と盛んに交易を行い、商業・貿易センターとしての役割を担った (清水 1998: P150)。それと共に、市内は外敵の侵入に備えて、丸太を組んだ簡素なものではあったが墨壁で囲まれ、大砲によって要塞化されていた (ホアキン 2005: P36)。

それではフィリピンの周辺状況はどのようなものだったのだろうか。当時東南アジアではイスラム教徒の勢力が強まっており、1514年頃にはフィリピン南部にスルー、

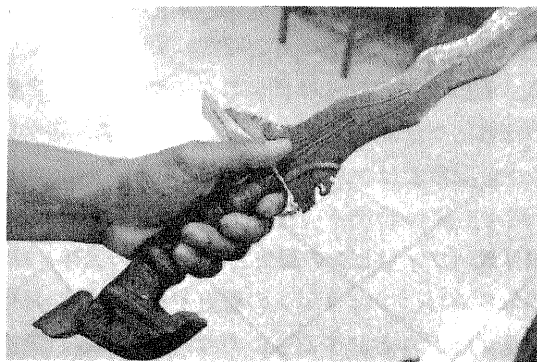


図4-1 13世紀頃のものとする剣の複製品

マギンダナオ、ブアヤンなどのイスラム諸王国が成立した。フィリピン南部から、現在のブルネイ、インドネシアを結び付けるスルー海域は、イスラム王国のスルタン支配の下、海洋民や交易商人が活発に往来し、ヨーロッパの陸続国家とは異なった、流動性の高い「海洋イスラム」世界が成立しつつあった（早瀬 2003: p16～17）。一方、ポルトガルがムラカ王国を占領するなど、ヨーロッパの足音が徐々に近づいていた。

アーニスの発祥

このような歴史的状況の中で、アーニスはどのような形で発祥したのだろうか。ここではいくつかの諸説に基づいて考察してみよう。厳密に言うと、アーニスとはスペイン植民地期に発達した武術を指しており、それ以前に今日フィリピンと呼ばれる地域にはカリ (kali^{xiv}) と呼ばれるアーニスの原型的な武術が存在していたとされる (PRESAS 1974: p10, JOCANO 2001: p4, NEPANGUE 2001: p10, WILEY 2001b: p32)。カリの起源については、今日インドネシアと呼ばれる地域を筆頭に、さまざまな人々や文化が流入する中で成立したとする外來說が有力である (PRESAS 1974: p10, WILEY 2001b: p34～35)。

特にインドネシアの武術が影響が強いとされている理由は、東南アジアに広く存在するシラット (silat) と呼ばれる武術と現在のアーニスとの間に、舞踏的な動きを含んだ技法など、類似している部分が見いだせること (RIVERA 2001: p16) ^{xv}、フィリピン南部のミンダナオ島のイスラム教徒 (ムスリム) にカリに類似した武術が存在していること (PRESAS 1974: p10, RIVERA 2001: p16)、といった状況証拠からインドネシアーフィリピンという武術の経路が推測されたのである。もっとも、ムスリムの武術とカリとの間には何の関連性も見いだせないとする主張もあり (NEPANGUE 2001: p11)、研究者の間でも見解の一致を見ていないというのが現状である。

それでは、カリが流入した時期についてはどうだろうか。これについては、7世紀から14世紀にマレー半島を中心として栄えたシュリーヴィジャヤ国、あるいは13世紀から16世紀にかけてジャワ島を中心に強大な勢力を誇ったマジャパヒト朝 (Madjapahit) の時代にフィリピン南部地域がこれらの王朝の勢力下にあったことから、そのいずれかの時代に流入したとする説がある (JOCANO 2001:p5)。この説では、7世紀から16世紀までかなりの時間的な開きがある。一方ボルネオ (カリマンタン島) からの移住者がカリを伝えたという説は、13世紀頃と比較的時期を限定している (PRESAS 1974: p10, JOCANO 2001:p4)。

ここで重要な点は、カリが現在アーニスのような棒術ではなく、剣を主体とした技法、つまり剣術であったとされている点である。これは、ミンダナオ島、ルソン島をはじめ、フィリピンの多数の地域でシュリーヴィジャヤ、マジャパヒト時代の頃のものと考えられる剣が多数発掘されていることを根拠にしていると思われる。「剣」は単なる歴史資料ではなく、今日アーニスの実践者がこの武術の起源や過去の歴史との連続性を語る上で重要な象徴と化している。剣の象徴性がどのような形でアーニスの実践に織り込まれているかは、第V章で考察することにする。

2. 植民地期におけるアーニスの変容

スペインの接触と植民地支配

マニラ市中心部の広大な敷地面積を誇るルネタ公園（リサール公園）の一角に、地面に突き立てた剣の柄に手を置いた、筋骨隆々とした男性の巨大な銅像が鎮座している。彼はフィリピン最古の英雄として今なおフィリピンの人々に親しまれているラブラブ（Lapu-lapu）という人物である。彼がフィリピンの歴史に名を留めることになった理由はただ一つ、大航海期にスペインから世界一周を目指す冒険旅行の途上にあつたマゼラン（MAGELLAN）率いる船団を、戦闘の末撃退したという史実である。

ラブラブは、16世紀にフィリピン群島の中心部に位置するセブ島周辺を統治する有力な支配者だったという。そして1521年、セブ島の隣にあるマクタン島と呼ばれる小島にマゼランの船団が到着する。当初はマゼラン側と、ラブラブらフィリピンの人々との間の関係は友好的なものだったという。しかしマゼランによるフィリピン群島のスペイン領有宣言を機に両者の関係は急激に悪化し、ついにマクタン島において戦闘が勃発した。フィリピン側でこの戦いを指揮した人物こそラブラブであり、結局地の利と数の優位を活かしたフィリピン側が近代装備のスペイン側を圧倒し、指揮官のマゼランが戦死したスペイン側は撃退されてしまう。この歴史的な出来事が、現代のフィリピンにおいて、「スペインの侵略から祖国フィリピンを救った人物」として、彼の威光を高めることとなったのである。

この敗北でスペイン船団は一端退却するものの、1570年6月には再び陣容を整え、今度は中部のセブ島ではなく、フィリピン北部ルソン島の都市、マニラに上陸する。当時のマニラとその周辺には、インドネシアから伝来したイスラム教を信奉する小王国が点在しており、中でもマニラは、人口約4000人を抱える、当時のフィリピンでは最大規模の都市だった。マニラはラハ・ソリマン王の統治下にあつたが、幾度かの戦闘の末、ソリマン王はスペイン軍に降伏した。ソリマン王の降伏を受けて、1571年5月にスペインの総督レガスピはマニラの領有を宣言すると共に、本格的な植民地支配に乗り出した（ホアキン 2005: p42～51）。以降、フィリピンは400年近くにわたる植民地支配を経験することとなる。

カリからアーニスへの変容

1521年のマゼラン来航は、フィリピンとスペインが本格的な接触を開始した歴史的な事件としてフィリピン史に刻まれている。そしてこの史実はアーニスの物語においても、重大事件として捉えられている。アーニスの物語によると、ラブラブはマクタン島におけるマゼランとの戦闘の際、カリを用いてスペインの兵士を圧倒したというのである。フィリピン最古の国民的英雄として現在でも親しまれているラブラブを介して、フィリピンの史実とアーニスの伝説は結びつくことになる。

300年以上にわたるスペイン植民地期の中で、フィリピンは政治的・経済的のみならず、文化的にもスペイン文化の大きな影響を受けた。そしてちょうど、スペインがもたらしたカトリッ

クが、フィリピン群島全域で古来より信じられていた精霊信仰と結びついて、フォーク・カトリシズムとなったように、カリもまたスペイン文化の影響を受けて大きく変容していった。

まずは、スペイン植民地行政府が1596年に発布した武器の携行禁止令のために、少なくとも表向きはカリの修練が出来なくなった。そのため、当時の修練者達は、様々な工夫を施して、何とかアーニスの技法を後世へ伝えようとしたという。一つ目の工夫とは、従来用いていた剣を、日常的に用いられていた棒に持ち替えて、剣術から棒術へと技法を変化させたという。二つ目は、公の場で武術の修練を可能とするために、技法に舞踏的な要素を付け加えたというのである^{xiv)}。

さらにもう一つの変化としては、「カリ」から「アーニス」への名称をはじめとして、技法の名称にスペイン語由来の単語が多数加わったことである^{xv)}。因みにアーニスとは、スペイン語で「甲冑」を意味する“arnes”から派生したものだという。この用語的な変容には1637年に、フィリピン民衆のキリスト教への改宗を目的として宣教師が紹介した宗教劇「モロモロ (moro-moro)」が大きな役割を果たしているという。つまり、「モロモロ」の中で見せ場となっているキリスト教徒対イスラム教徒の合戦場面で、スペインの兵士に扮した役者が剣の代わりにカリの技を披露することで、いつしか役者の付けていた鎧の名称が武術の名称そのものに転換してフィリピンの人々に受け入れられていったという (PRESAS 1974: p11~12)。

3. 民衆蜂起と抵抗の手段としての伝統的武器

フィリピン革命期の民衆の抵抗

長い植民地期を経て、フィリピンでは19世紀頃より、社会変革の気運が人々の間で高まった。これは「イルストラド」(ilustrado: 啓蒙された人) と呼ばれる、ヨーロッパの啓蒙思想を学んだ知識層が登場したことによる。彼らは農民が貧困から絶望的な反乱を起こす現実 (スタインバーク 2000: p88, プロサン 1984: p22) を目の当たりにし、植民地支配からの完全な自立と民族の団結を求めるようになった。ホセ・リサル (JOSE P. RIZAL)^{xvi)} もこうしたイルストラドの一人である。彼の大きな功績は、「フィリピン人」という集団のまとまりに基づいて諸民族が団結する理論的な基盤を提供したこと^{xvii)}、フィリピン社会の歴史をフィリピン人自らが編み直す必要性を訴えたこと、先スペイン期の文化や伝統の発掘を試みたことなどを挙げる事が出来る。イルストラドは思想的な側面から、自らの民族的出自の象徴としてフィリピンの文化に着目し、復興を試みたのである (弘末 1999: p262~263)。

一方、民衆の行動はより直接的であった。フィリピンで古くから伝わるボロ (bolo) と呼ばれる山刀は、フィリピンの民衆が保有することを許された数少ない刃物だが、1896年に勃発したフィリピン革命前後の民衆蜂起で、民衆が持ちうる数少ない武器の一つとなった。例えば革命家ボニファシオが率いた民衆が蜂起した際に、彼らはごくわずかのライフル銃を除きボロしか武器を所有しておらず、貧弱な武装で警官隊にゲリラ戦を挑んだ (鈴木 1997: 108)。

革命初期には民衆側にはわずかの銃器しか持ち合わせがなかったため、ボニファシオのよう

にやむを得ずボロを手に近代装備に身を固めたスペイン軍や警官隊と戦わざるを得なかったという事情があった。しかし、後年の蜂起では、前近代的な武器を用いることに、植民地的状況を強いる近代世界に対する強い異議申し立てと民族的な独自性を主張する意味合いが込められていたことも指摘できる。例えば1938年のサクダル党の蜂起でも、農民達の多くは武装した警官隊に対してボロで抵抗している。彼らは近代的な政治体制の枠組みでの改革の展望に絶望し、過去の栄光の再来と神の加護を信じて護符（アンティン・アンティン）をまとい、近代装備の警官隊に対して、あえて無謀とも呼べるような戦いを挑んだのである（鈴木1997: p174）。

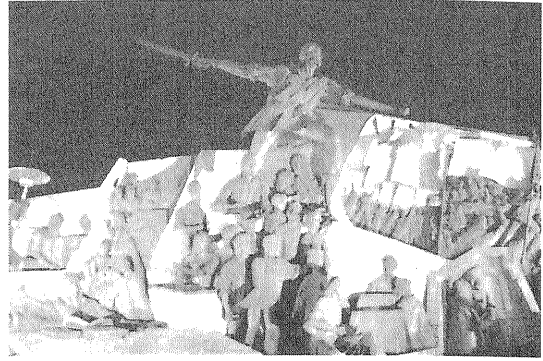


図4-1 マニラ市内のA・ボニファシオの彫像

こうした剣に代表される前近代兵器の象徴性は、現在マニラ市内中心部に建立されているフィリピン革命を記念するレリーフに見いだすことができる。このレリーフの中央部にはボロを振り上げたボニファシオの姿が刻まれている（図4-1）。労働者階級出身の革命家ボニファシオの英雄的な威信は、ボロを手にすることによってますます強められているのである。

こうした剣に代表される前近代兵器の象徴性は、現在マニラ市内中心部に建立されているフィリピン革命を記念するレリーフに見いだすことができる。このレリーフの中央部にはボロを振り上げたボニファシオの姿が刻まれている（図4-1）。労働者階級出身の革命家ボニファシオの英雄的な威信は、ボロを手にすることによってますます強められているのである。

革命とアーニス

それではアーニスそのものは、この当時どのような状況にあったのだろうか。ドン・ホセ・デ・アゼス（D. J. AZES）と言う人物が、1800年代終わり頃に、アテネオ・デ・マニラ高校（Ateneo de Manila high school）にアーニスを含めた総合的な武術教室を開いたとする記録がある（WILEY 2001a: p57, YAMBAO 1957）。ここでアーニスを学んだ生徒の一人が、先に述べたホセ・リサルである。彼はその後もアーニスを愛好し、彼自身も1887年にカランバ市（Calamba）にアーニスの教室を開いたという（NAVARRO 2001: p48）。彼自身はよほど武術に関心があったのか、フィリピンで継承されてきた武術を、重要な伝統文化の一つとして紹介している（ibid: p47~48）。

また、中村は無名戦士の逸話として、アメリカの植民地支配に抵抗して、南部ミンダナオ島、スルー諸島などのムスリムが反旗を翻したモロ戦争（1903-1913）で、アーニスの使い手が反乱の先頭に立って、アメリカ軍の銃弾をもろともせずに関った事例を紹介している^{xviii}）。

以上、16世紀から19世紀のスペイン植民地期を中心に、カリがアーニスへと変容していった過程を示した。剣術から棒術へ、舞踏的身体技法の付与といった技法の変容の過程からは、民衆が一方では植民地支配の状況を受け入れながらも、他方では自らの文化を様々な手段を駆使して維持し続けていったというしたたかな姿を見いだすことができる。20世紀前後のフィリピン革命の動乱期では、実際にボロや剣などの前近代的な武器は、現実としても象徴的な意味におい

ても、民衆に抵抗の力を与える手段として機能したのである。

こうした歴史的な変遷が、現代に於いてアーニスにどのような価値観を付与したのだろうか。次章では、現代フィリピンにおけるアーニスの状況を、「伝統文化の再活性化」の視点から眺めることにする。

第V章 現代フィリピン社会における「伝統武術」アーニスの再活性化

本章では、1946年のフィリピン独立から現在までを考察の対象としている。まず本章がアーニスの現在の状況について、「再活性化」と表記していることについて理由を説明する必要があるだろう。この言葉自体を文字通り解釈すると、もともと存在していた事物が、何らかの理由で一時的に停滞し、その後再び勢いを取り戻した状態や経過を指し示していると言える。

それではアーニスもまた、一度は停滞し、その後復活したというのだろうか。本章の事例の人々の語りからは、明らかにアーニスそのものやその歴史を、現在から「復活した伝統文化の一つ」として解釈していることが理解できるだろう。こうした語りからは、もともと先スペイン期に存在した豊かなフィリピンの武術文化は、植民地期に抑圧された。しかしフィリピン史の内幕でアーニスは伏流水のように密かに存在し続けたことで、現在のアーニスに繋がっている、という一つの語りの流れが見いだせるのである。

アーニスの伝統概念には、単なる歴史的な連続性だけではなく、「支配への抵抗」という観念が重要な意味を持っていることは明らかである。英雄ラブラブは、アーニスの原型的な武術を用いて、侵略者であるスペインの兵士を撃退したとされる。その後の植民地的状況を考えると、彼は圧倒的な力で押し寄せてくるヨーロッパに対する、数少ない輝かしい勝利を体現する人物だった^{xix}。こうしたラブラブの勝利と力の象徴性が、アーニスを実践する人々の間でもどれほど重要な意味合いを帯びているのかは、アーニスの活動においてラブラブの肖像が繰り返し使われていることから理解できる。

ラブラブの存在は先スペイン期の歴史物語の中に留まった。しかしアーニスは違った。現在のアーニスと伝承との連続性を説明するためには、どのように植民地期において継承され続けてきたのかという語りが必要となる。そしてその語りを通じて、抑圧的な状況の中で生じたアーニスの変容を、民衆によるしたたかな「抵抗の証」とすることで、こうした変化はむしろ肯定的な意味で人々に受け止められ、さらに語り継がれることになった。

興味深い点は、アーニスの実践者や文化政策は、この武術を一度現代的な形式に作り替えた上で、何らかの象徴を選択的に付与することで、アーニスの「伝統武術」像を形成していることであろう。ここで言う現代的な形式とは、スポーツ化を指している。つまり、先スペイン期に存在していたとされる剣術カリの実践形態を忠実に復活させるのではなく、あくまで現代的な棒術アーニスを「伝統武術」として主張しているのである。

本章では、こうしたアーニスの現代における動向を明らかにするために、まず近年のフィリピンにおける、国民意識の高揚を意図した自文化に対する再評価運動の状況を示す。次いで1940

年代以降に顕著となった、古典的なアーニスの実践形態からスポーツ化への流れを見ていく。次いで、ここ数年で拡がりつつあるアーニスを取り入れた伝統文化教育について触れる。最後に現在の実践団体の活動状況を、2つの事例から具体的に眺める。そしてこれらの活動の中では、「剣」そして「英雄」という歴史的象徴を、アーニスの伝統性を表現する手段として動員していることを明らかにする。

1. フィリピン・ナショナリズムの台頭

まずは近年のフィリピンの社会情勢について簡単に触れておこう。1946年7月4日、フィリピンは共和国として悲願の独立を達成した。しかし日付からも明らかのように、独立はフィリピンの人々が自力で獲得したというよりも、アメリカから与えられたものだった^{xx)}。実際のところアメリカは第二次世界大戦終了後、フィリピンの動向に対して消極的な姿勢に転じていた。だが植民地体制下における既得権益の維持をもくろむフィリピン人エリート層の強い要望によって、むしろフィリピン政府の側が経済的・軍事的にアメリカ側に有利な協定を締結した。その後の東西冷戦により、東南アジア地域におけるフィリピンの重要性が増すと、ますますフィリピンはアメリカに依存していった。

だが、こうした従属的關係を民族主義者のレクタらは激しく批判し、彼らの批判を受けて、フィリピン政

団体名 (school, club)	設立年	設立者	本拠地
The Labangon Fencing Club	1920	不明	Cebu
Doce Pares	1932	Eulogio Canete	Cebu
Lapu Lapu Arnis Affeciandos	1932	Jose Vinas	Negros
Lorenzo Saavedra	1940?	Doring	Cebu
Lightning Scientific Arnis International	1947?	Benjamin Luna Lema	Manila
the Tondo School of Arnis	1951	Jose Mena	Manila
the Bacolod Arnis Club	1956	Sisoy Gyabros	Negros
Durex Self-Defense Club	1959	Gerardo Alcuizar	Cebu
the art of Tapado	1960	Romeo Mamar	Negros
Tornado Garote Self-Defense Club	1966	Florencio Roque	Cebu
Bakbakan International	1968	Christopher Ricketts	Manila
Modern Arnis	1969	Remy Presas	Manila
Kalis ng Tinagalogan	1971	Ren Ni	Manila
Sayaw ny Kamatayan	1972	Napolean Fernandez	Manila
Lapunti Self-Defense Club	1972	Felimon Caburnay	Cebu
Black Cat Self-Defence Club	1973	Magdeleno Nolasco	Cebu
the Philippine Arnis Confederation	1975	Crispulo Atillo	Cebu
the Punta Princera Eskrima club	1975	Artemio Paez	Cebu
the Oolibama Arnis Club	1977	Florencio Lasola	Cebu

表5-1 1920～70年のセブ及びマニラにおける主要なアーニス実践団体

(GODHANIA 2001: p53～56、WILEY 2001: p57～63)

府は1956年にリサル法という民族主義的な法案を成立させた。これは全国の学校で国民的英雄のホセ・リサールの生涯やその著作を教えることを義務づけるというものであった。また1966年に起こった「第二次プロパガンダ運動」と呼ばれる文化運動は、中国の「文化大革命」の影響を受け、学生・知識人を中心に、教育、文化、マスメディアのフィリピン化・大衆化を求めた。このように自文化の見直しを通じて、フィリピンではアメリカ文化に代わる自らの自立した文化の模索の機運が高まっていった（深見・早瀬 1999:p402~403）^{xxi)}。

2. 1940年代以降のアーニスの状況

こうしたフィリピンの社会情勢の中で、アーニスはどのような状況にあったのだろうか。大きな流れとしては、限られた修練者のみが実践する武術から、徐々に一般社会へと普及していったことが挙げられる。その動きは、武術の修練を目的とした実践団体の設立や、学校の体育教育への浸透、スポーツ化に伴ったより安全な技法への発展といった形で現れている。

実践団体の数は、1932年にセブ市でユーロジオ・カニーテ (E. CANETE) という修練者が組織したドセ・パレス (Doce Pares) ^{xxii)} をはじめとして、1940年代から急速に増加している (表 5-1)。

なぜ、これ以前の記録が少ないのだろうか。主な要因としては、アーニスの実践者が、活動内容を文書などで記録・保管しておくことに消極的だったという事情が挙げられる。そのためこれ以前のアーニスの動向を辿るには、実践者の記憶を辿るほかないのが実情なのである (GODHANIA 2001:p53)。

数少ない記録が伝えるところによると、当時のアーニスの実践を担っていたのはほとんどが男性であり、しかも彼らの技の熟達さを示す証明書や階級などの客観的な指標は存在しなかった。そのためアーニスの修練者として評価を高めるためには、決闘 (Juego Todo) で強い相手と戦い勝利するしかなかった。このように当時のアーニスの実践は、極めて危険性の高いものだったという (PASA 2001 :p152~153)。

アーニス実践者A氏の個人史

こうした当時の状況を知る上で、A氏という人物の個人史が参考になるだろう。彼は老練なアーニス修練者として、すでに亡くなった現在でもアーニスの修練者の間では半ば伝説的な存在である。彼自身はアーニスをあくまでも護身の技と考えていたが、弟子達の強い要望を受けて晩年実践団体「K・I」を開いた。彼は、いわば古典的なアーニスと現代のアーニスの両方を体現した人物と言える。

彼は1900年にバンタヤン島に生まれ、1997年に死去している。幼少の頃より血気盛んで、しばしば暴力沙汰や決闘の末の殺人の罪で刑務所に入所していたという (DIEGO 2002: p3~8)。彼の強さには秘訣があった。彼には父親から教わった戦いの技があったのである。ボロ (山刀) を自在に操るその技は、彼の家族が代々伝えてきたものだと言われているが、その技を学ぶのは彼

の家族やごく親しい者に限られており、技の対処方法を相手は知る由もなく、彼の強さは悪名と共に広まった。

1940年、彼は40歳の時にマニラに仕事を求めて移住したが、その直後に日本軍のフィリピン侵攻に遭遇する。抗日ゲリラに参加した彼は、日本軍と戦いを繰り広げる。戦後は、マニラのトンド地区で商船の船員として働いていたが、やはり仕事先でも度々乱闘騒ぎを引き起こしていたという (ibid:p13)。だが、こうした彼の振る舞いは、血の気の多い船員の世界では悪い意味ばかりではなかった。彼の名はたちまち船員仲間の間に伝わり、彼の技を学びたいと考える若い船員達が彼の元を集った。

彼は当初はこうした若者達を嫌い、「お前達は十分に強いではないか。帰れ」と厳しい言葉を浴びせたり (ibid :p18)、苛立つと暴れ回る (ibid :p19) などしたというが、単に厳格なだけではなく、彼が好きな酒を振る舞われたり、鬪鶏 (sabong) を贈られると気を許すところもあったようである。最終的に彼は若者達の熱意に根負けし、彼らに技を教えることを認める。こうした弟子達が中心となって、マニラ港にほど近いトンド地区に道場を開設したのは、ようやく1987年になってからのことであり、1976年にA氏の一番弟子であるD氏が入門を赦されてから11年が経過していた [ibid: 23]。

実践団体としての成立がこれほどまでに時間を要した理由は、やはりA氏の実践に対する姿勢にあったようである。彼にとってアーニスとは自らの身を守るための技法であり、家族以外の人々にその技術を教えるといったことはほとんど想定していなかったのである (ibid :p19~20)。そしてようやく何人かの人々に技を指導することを認めても、その教授方法は自らが技を披露してみせる場合がほとんどで、実践形式で行われる稽古 (ibid :p27) では、弟子達が負傷することもしばしばだったという。厳しい対面指導の中で、文字通り身体で技を覚えることを要求したのである。A氏に直接指導を受けた生徒達は、彼が優れた技法と豊富な格闘の経験を持っていることは認めても、良い教師とは言えないと回顧している (ibid: 27)。

A氏は“Tatang”の名で、カリス・イラストリシモの道場生だけではなく、アーニスを修練する多くの人々に、存命中から伝説的な師範の名として広く知られていた。文字通りに解釈するならば、この言葉は「父」や「親父」といった親しみを込めた意味なのだが、彼のこの別名には、敬意と共に畏れの意味合いを帯びていた (ibid: p6)。その理由は、以上に示した彼の波乱の人生と、一度怒ると手が付けられなくなる気性の激しさにあった。

重要な点は、A氏にとって、アーニスは純粋に我が身を防御するための手段であったことである。彼は晩年になるまでアーニスの技法を商業的に利用したり、一般社会に自らの技法を普及させようとは、考えていなかった。A氏の技法を特徴に応じて分類し、学びやすい形にまとめ上げる作業は、彼の直弟子となった人々の手に委ねられていた。そして道場としてその継承の歴史を公式に編纂し記述する作業もまた、弟子達の仕事だったのである。

A氏のような古典的なアーニスの実践者が活躍していた時代はやがて終わりを告げる。1932年にフィリピン政府は改訂刑法を施行し、こうした危険性の高い決闘を禁じたのである。以降、

アーニスはスポーツ化という次なる段階を迎える。

3. アーニスのスポーツ化

a. アーニスのスポーツ化に関する制度面での動向

アーニスのスポーツ化の背景には、国家の健康政策が大きく関わっている。1974年にマルコス大統領は大統領令604号を発した。これは、経済的な低迷の中で、特に青少年の健康状態が悪化しつつある状況を懸念する声を受けた措置であり、フィリピンの青少年の身体能力の向上や健康状態の改善を謳っていた。この布告を受けて、政府はアマチュアスポーツ振興を主な課題に据えた青少年スポーツ発達省 (the Department of Youth and Sports Development) を設置した。同省の指示の下、1975年にNational Arnis Association of the Philippines (NARAPHIL) が、政府の公認するアーニスの協議会としては初めての全国組織として発足した。

1979年に、セブ島のセブ市で開催された、初のアーニスの全国的な大会 (the first National Arnis Championships) は、アマチュアスポーツとしてアーニスが歩み始めたことを示すイベントとなった。この大会に於いて、様々な制度が導入された。例えば、この大会で初めて「マスター」「グランドマスター」といったアーニスの称号が使われ、以後、熟達した修練者の証としてアーニスの指導者が名乗る称号として定着する。さらに、競技規則に則って試合場で互いの技を競うことで勝敗を決する方式も、公式にはこの大会で初めて採用された (PASA 2001: p154)。試合の判定が不明確であるなど、整備の不十分さも目立ったが、ともあれここによりやく、アーニスは伝統武術から本格的なアマチュアスポーツとしての第一歩を踏み出すことになった。

b. 体育授業科目としてのアーニス

フィリピン政府が1987年に発布したフィリピン憲法では、体育教育の重要性を認めると共に、フィリピンの伝統的な遊技やスポーツを、積極的に体育教育に取り入れるように求めた。それに加えて、教育、文化およびスポーツ省は、1990年に発した省令58号で、アーニスを高等教育機関の大学における体育教育の選択科目に指定し、その指導要綱を定めた。1995年の省令294号では、アーニスの教員訓練に関する規定を公布するなど、1980年代後半より、アーニスの体育教育への組み込みが進んだ。

学校スポーツならびに体育教育局 (Bureau of physical education and school sports) は、初等教育と、中等教育の基本方針として、9つの主要計画を掲げた。その一つが、伝統ゲーム、スポーツプログラムである。これは、アーニスを中心としたフィリピンの伝統武術や伝統的なゲーム)を子供たちに体験学習させることを通じて、これらの伝統文化を維持し、発展させること、さらに全国的な大会の開催を行うことを推奨するというものだった^{xxiv)}。

この計画に沿って、同局はフィリピンの公立学校に、アーニスの体育授業への取り入れを指導した。計画では、公立の初等教育はもちろんだが、より職業教育・訓練の色彩の濃い高等教育でも、1週間に1時間の割合で設けられている体育教育 (Physical Education, PEと呼ばれる)

の中に、伝統舞踊やゲームと共に、アーニスも選択体育科目として登録することとなった^{xxv)}。

パサ (A.G. PASA) の調査によると (PASA 2001:p157~162)、セブ市の7つの総合大学と7つの単科大学でも、省令に従って体育教育に選択科目制を導入しており、現場で実際に指導に当たる体育教員自身も、アーニスを選択科目に導入することに前向きであるとしている。

ただし、こうした計画が予定通りに進行しているのかと言えば、必ずしもそうとは言い切れないという。現在フィリピンでは、小学校だけでも全国に41,949校あり、そのうち公立小学校は37,161校である。首都近郊 (National Capital Region) の公立小学校の数だけでも497校にのぼる^{xxvi)}。一方で学校数と比較して、アーニスの技を指導できる教員や外部からの講師の数が絶対的に不足しているために、実際にアーニスを授業科目として採用するかどうかは、各学校の裁量に任されている状況であるという。

c. 愛国教育 (Makabayan) と民族芸能 (Musika, Sining at Edukasyon) におけるアーニス

アーニススポーツ化と平行して、初等教育においては、アーニスを伝統文化の体験学習の教材として用いている。小学校の生徒達は、「愛国教育」(Makabayan・マカバヤン) と「民族芸能」(Musika, Sining at Edukasyon) という授業の中で、ヨーヨーなどの伝統的な遊技や伝統舞踊と並んで、アーニスの技を体験する。

愛国教育 (Makabayan) とは、フィリピンの伝統文化や地理、歴史の授業を通じて、国家に対する愛国心を育成しようとする授業科目である。日本の科目に例えれば、国語と社会と道徳授業をひっくるめたものといえる。もう一つの民族芸能 (Musika, Sining at Edukasyon) は、フィリピンの舞踊や歌など、身体を用いた伝統文化を学ぶものである。

4. アーニスの実践と伝統の主張

近年のアーニスが、時代に適合する形で大きく変化していったことは、以上の事例から明らかだろう。こうした動きの中で、アーニスの実践団体はどのような活動を展開しているのだろうか。ここでは、2つの団体を例に取り上げてみる。そしてこれらの活動の中で、それぞれ「剣」と「英雄」がアーニスの伝統を印象づける象徴として重要な役割を果たしていることを示す。

a. 剣に込めた歴史的連続性：「K・I」

「K・I」とは、本章前半部で「伝統的」アーニス実践者として紹介したA氏と、彼の高弟であるD氏らが中心となって1986年に創設したアーニスの実践団体の一つである。現在、カリス・イラストリシモはフィリピンではマニラ市のトンド地区に一つのトレーニング・ジムが存在し、さらにカナダ、アメリカにそれぞれ一箇所ずつトレーニング・ジムを設置するなど、積極的に海外にも実践活動を展開している。そしてこの流派がインストラクターとして公認している修練者は、フィリピンが7名、カナダが1名、アメリカが2名である。さらに、フランス、イギ

リス、オーストラリアにそれぞれ1名ずつ公認のインストラクターが存在する。そしてそれぞれのトレーニング・ジムに修練者が所属し、師範から技の指導を受けるのである。

この団体の特徴は、その技法にある。一般的なアーニスの修練がバストン（棒）を用いるのに対して、「K・I」では、創設者A氏の家族が代々受け継いできたという剣を主体とした修練を行っている。既に述べたとおり、アーニスの継承にまつわる伝承や諸説によると、アーニスは元々カリという剣術であったとされており、「剣」が伝承とこの団体の現実の実践との共通項となっている。

もっとも、実際にはこの団体が修練している技法がはるか昔の先スペイン期まで遡ることが出来るのかどうかを判断することは極めて難しい。だが、修練の中に古典的な技法を織り込むことで、この団体の正統性と独自性を打ち出すことに成功している。

b. 国民的英雄ラブラブの英雄像を利用：NGO団体「PIGSSAI」

次の例は「PIGSSAI」というNGO団体である。PIGSSAIの正式名称“The Philippine Indigenous Games and Sports Savers Association, Inc.”から分かるとおり、アーニスを中心としたフィリピンの伝統的な武術や遊技をフィリピン国内に普及を促すことを活動の目的としたNGO団体である。NGO団体とはいっても、本部はフィリピン観光省内に置かれており、さらに同省の高官が団体の代表者を兼任していることから、政府と極めて強い結びつきを持った団体であることが分かる。この団体では1998年の設立以降、フィリピンの伝統的な身体文化の1. 保護、2. 発展、3. 普及の3つを柱とした文化事業を行っている。その目的は、子ども達にフィリピン伝統文化の価値を教育し、かつその文化を楽しく学ぶ機会を提供することに置いている。

活動内容を具体的に挙げてみよう。まずは、毎週日曜日の夕方にルネタ公園（リサール公園）で開催する“Palarong Pinoy Festival sa Luneta”と名付けられたスポーツイベントがある。このイベントでは、マニラ市民に、アーニスやヨーヨーなどの体験や、グループ発表の機会を提供している。午後2時から6時に子ども向けの伝統遊戯の体験企画が行われる。そして夕方6時以降は、フィリピン各地から呼び集められた団体による、フィリピンの伝統舞踊やアーニスの上演を行う。次に、ラジオ番組を通じた活動の宣伝、そして、Palarong Bayanと呼ばれる年一回のトーナメント大会の企画・運営などがある。

興味深い点は、この団体ではアーニスの伝説的な実践者として国民的英雄ラブラブを大いに活用している点にある。ポスターに登場するラブラブ像はもちろん（図5-1）^{xvii)}、圧巻は台座を含めて約10メートルにもな

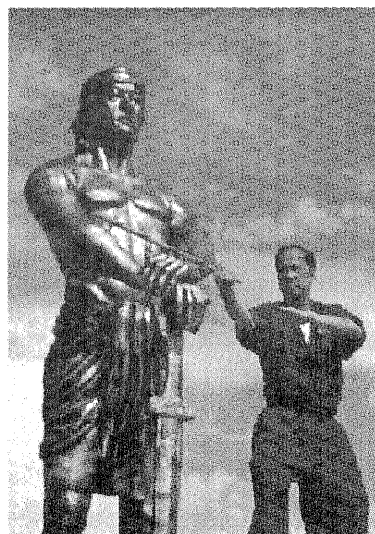


図5-1 PIGSSAIが使用しているポスター

ろうかという彼の銅像である（図5-2）。PIGSSAIのイベントはこの銅像が見下ろす広場で開催されるため、イベントで実演されるアーニスト、その背後にそびえ立つラプラプとの関連性が視覚的に強烈に印象づけられることになる。この銅像はもちろん、PIGSSAIが独自に建立したのではなく、観光省がルネタ公園の新たな目玉として2005年4月に建てたものである。PIGSSAIが観光省の事業と連携を保つこと



図5-2 観光省前のラプラプ像

ができるのは、両者が組織的に密接な関連を有しているという優位点を活かしているためと言えるだろう。

2. 「文化の喪失意識」とアーニス

2つの団体は、共にアーニスを活動の中心に据えているとは言っても、一つは武術の修練を目的とした実践団体、他方はスポーツ活動を主体としたNGOと、その組織的な特徴も活動の方向性も異なっているように思える。

ところが、アーニスの普及活動の中に、共通した問題意識を見いだすことが出来る。それはフィリピンが長年文化的な支配を強いられてきたという意識であり、こうした意識を克服する手段としてアーニスの活動を捉えている点である。

PIGSSAIの代表者J氏は、植民地経験を経たフィリピンの人々が抱く「文化の喪失意識」を克服する上で、アーニスの普及は大いに価値がある、と説明する。

「フィリピンの人々は、カトリックを信仰し、日常的に英語を話します。植民地時代にもたらされた文化が、今や生活の中の隅々にまで根付いているのです。しかし、そのことが、フィリピンの人々に、我々は自分たち自身の文化を持っていないのではないか、という意識を生み出しました。そしてこうした文化の喪失意識（cultural trauma）を振り払おうと、過剰にアメリカやヨーロッパの文化を礼賛し、取り入れようとしてきました。だが私は、フィリピンにはアーニスというスペインが到来する以前から受け継がれてきた文化が存在していたということをフィリピンの人々に知ってもらいたいのです。アーニスにより一般社会に普及することは、フィリピンの人々に自らの伝統文化の価値を認識させ、我々はこんな優れた武術を受け継いできたのだ、というフィリピン国民としての誇りへと繋がるはずです。」

（筆者による聞き取り調査・2005年4月 マニラ市にて）

彼の述べる喪失意識とは、文化人類学者のロサルド（ROZALDO）の表現を用いれば、「文化を持たない人々（people without culture）」（ROZALDO 1989: p196~198）としてフィリピンの人々を捉える見方と共通していると言えるだろう。ロサルドはブラタオ（BULATAO）の「二段重ねのキリスト教（split level Christianity）」論（BULATAO 1965）に見られるような、フィリピンの文化を未発達、あるいはヨーロッパの物真似、あるいはお仕着せのなものであるとする見解を批判したのだが、こうした見方はフィリピンを眺める外部の人々だけではなく、フィリピンの人々自身にも深く浸透していることが、D氏の発言から読み取ることが出来る。

一方、マスターの一人M氏は、アーニスの「抵抗の文化」、「フィリピンの在来文化」という価値観こそが、むしろアーニスの普及を妨げてきたと指摘する。

「アーニスは確かに戦いの技術として多くの人々が受け継いできました。継承の過程で、支配者の目を欺くために舞踊の動きを取り入れて、一時は舞踊として学んだり、宗教劇の中で演じる形で受け継がれてきました。その間、武術としては機能を果たさなかったかも知れませんが、こうしたヨーロッパからもたらされた踊りや劇を、文化的記憶（cultural memory）の手段として活用したのです。

だが、剣から棒への転用などの技法上の変化は、人々のアーニスに対する価値観に別の意味合いをもたらしました。つまり、ヨーロッパの文化を取り入れることを重視する上流階級の人々にとって、棒つきれを使って戦うアーニスなど、貧しい人々が使う武術として映ったのです。彼らは自ら戦うことはまずないし、いざ戦う時は、銃を使えばいいんですからね。

残念ながら、現在でもアーニスは下層階級の人々の武術という偏見が根強く残っています。アーニスが他のスポーツと違って普及が遅れているのは、こうした偏見が原因なのです。」

（筆者による聞き取り調査・2005年5月 マニラ市にて）

スペインがフィリピンの民衆をカトリック化するために持ち込んだ宗教劇を、フィリピンの人々は伝統文化を保存する記憶装置として活用した、という語り^{xxviii)}と、その根拠とされる技法的な変容は、一方では「したたかな民衆の抵抗」の象徴という意味合いをアーニスに与えている。しかし他方では、ヨーロッパ文化を積極的に取り入れるフィリピンの上流階級と、在来文化を保持する民衆という構図においては、むしろこれらの語りは低級な文化（low-level culture）の指標となったと彼は指摘する。そしてこうした偏見を取り払うためにも、アーニスがより人々の中に定着することが重要であると主張する。もちろん、既に見てきたとおり、1930年代という比較的最近の時期まで、アーニスは荒くれた男達の争いの手段として用いられてきたことも、「危険な武術」とするアーニスの価値観を助長し、自ら普及の門戸を狭めてきたことも事実であろう。

こうした事情はさておき、これらのアーニスの実践活動からは、単に古い文化の復興を目指すだけではなく、過去の歴史を捉え直し、乗り越えようとする意図が込められていることが、彼らの発言から読み取ることができるだろう。

結語と今後の課題

以上、本論では、アーニスの「伝統」概念がどのように形作られ、用いられているのかについて具体的に検討した。

まず本論で扱う「伝統」とは、具体的な概念としてではなく、様々な文脈や関係性の中で形成されていくものとして捉えることを示した。そしてアーニスの特徴的な技法とフィリピンの史実を絡めることで、アーニスの「伝統性」が人々の中で真実味を持って語られている状況を明らかにした。以上のような分析を踏まえて、アーニスの伝統を語り、実践することは、単なる武術の修練というだけではなく、フィリピンの歴史を捉え直し、過去を乗り越えようとする側面があることも明らかにした。

最後に、本論を踏まえて今後の研究課題について述べたい。本論で度々取り上げた実践団体「K・I」では、A氏からD氏へと世代交代することで、アーニスは個人的な戦いの技から、トレーニング・ジムでより多くの人々が学ぶことができる技法へと変化した。この世代交代に代表されるように、アーニスの活動の方向性は多くの人々が共有することが出来る、より開かれた身体文化へと向かっているように見える。例えば、あえて今回の本論では触れなかったが、実践団体の海外展開や、メディアが配信するアーニスのイメージの配信が海外の人々がアーニスに触れる機会を生みだし、多くの人々が世界各地でアーニスを修練する状況が出現しつつある。こうした国外の動向が、「フィリピンの伝統武術」というアーニスの文化的な価値に何らかの変化を生じさせたり、新たな文化的要素を付加する可能性も考えられる。今後は、フィリピンという限定された地域内だけではなく、より幅広い地域からアーニスを捉え、グローバル時代における伝統文化のあり方というより大きな研究の展望を拓くことこそが、アーニスを研究する意義ではないか、と考えている。

引用文献

- Agoncillo, Teodoro A. 1956. *The Revolt of the Masses*. Quezon City: University of the Philippines Press.
- アンダーソン, B/白石さや・白石隆訳 1997 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』増補版 NTT出版 (Anderson, Benedict. 1983/1991. *Imagined Communities: reflections on the origins and spread of nationalism*. London: Verso Editions, and NLB)
- アンダーソン, B/糟谷啓介訳 2005 『比較の亡霊: ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社 (Anderson, Benedict. 1998. *The spectre of comparisons : nationalism, Southeast Asia and the world*. London: Verso)
- Bulatao, J. 1965. "Split-Level Christianity." *Philippine Sociological Review*, Vol. 13, No 2.

- プロサン, C/井田節子訳 1984 『我が心のアメリカーフィリピン人移民の話ー』 (Bulosan, Carlos. 1973. *America Is in the Heart*. Seattle: University of Washington Press.) 井村文化事業社
- Corpuz O.D. 1989. *The Roots of the Filipino Nation*. Quezon City: Aklahi Foundation. 2 volumes.
- Diego, Antonio and Ricketts, Christopher. 2002. *The secret of Kalis Ilustrisimo*. Boston: Tuttle Publishing.
- 江淵一公 2002 『バイカルチュラリズムの研究』 九州大学出版会
- アンチオーブ, G/石塚道子訳 2001 『ニグロ、ダンス、抵抗: 17~19世紀カリブ海地域奴隷制史』 人文書院 (Entiope, G. 1996. *Negres, danse et resistance: Pour une histoire de l'escavage dans la Caraïbe du XVIIe au XIXe siècle*. Paris: L'Harmattan.)
- 深見純生・早瀬晋三 1999 「脱植民地化への道」 池端雪浦編 『東南アジア史 II 島嶼部』 山川出版社: 366-405
- Godhania, Krishna K. 2001. "Combative vs. competitive Eskrima". In Wiley, Mark V.(ed.) *Arnis: Reflections on the history and development of the Filipino martial arts*. Boston: Tuttle Publishing.
- 早瀬晋三 2003 『海域イスラーム社会の歴史』 岩波書店
- 弘末雅士 1999 「近世国家の終焉と植民地支配の進行」 池端雪浦編 『東南アジア史 II 島嶼部』 山川出版社: 182-267
- ホブズボウム・E., & レンジャー・T./前川啓治・梶原景昭・他訳 1992 『創られた伝統』 みすず書房 (Hobsbawm, Eric and Terence Ranger (eds.) 1983. *The invention of tradition*. Cambridge University Press.)
- 池端雪浦 1987 『フィリピン革命とカトリシズム』 勁草書房
- Ileto, Reynaldo C. 1998. *Filipinos and Their Revolution: Event, Discourse and Historiography*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Inoue, A 2000. "Academism and the politics of culture in the Pacific." *Anthropological Forum*, 10 (2): 157-177
- ホアキン, N/橋本信彦, 澤田公伸訳 2005 『物語 マニラの歴史』 (Joaquin, Nick. *Manila, My Manila*. The Bookmark. Inc.) 明石書店
- Jocano, Felipe P. 2001. "A questioning of origins". In Wiley, Mark V.(ed.) *Arnis: Reflections on the history and development of the Filipino martial arts*. Boston: Tuttle Publishing. : 3-8.
- Keesing, R and R. Tonkinson (eds.) 1982. "Reinventing Traditional Culture: The politics of KASTOM in Island Melanesia." *Mankind* 13-4 (special issue). Kele-Kele, K. et al.
- Keesing, R. 1989. "Creating the Past: Custom and Identity on the Contemporary Pacific." *The Contemporary Pacific* 1: 19-42.
- May, G. 1997. *Inventing a Hero: The Post humorous Re-creation of Andres Bonifacio*. Quezon City: New Days Publishers
- Nepongue, Ned. 2001. "A questioning the origins of Escrima." In Wiley, Mark V.(ed.) *Arnis: Reflections on*

- the history and development of the Filipino martial arts*. Boston: Tuttle Publishing. : 9-14.
- 太田好信 2001 『民族誌的近代への介入 文化を語る権利は誰にあるのか』 人文書院
- 小佐野淳 2003 『図説 武術事典』 新紀元社
- Pasa, Abner G. 2001. "The implementation of Arnis in the physical education program of tertiary schools in Cebu city A proposed training program framework". In Wiley, Mark V.(ed.) *Arnis: Reflections on the history and development of the Filipino martial arts*. Boston: Tuttle Publishing. : 149-167.
- Presas, R. 1974. *Modern Arnis: Philippine style of stick fighting*. Mandaluyong: National Book Store.
- Presas, R. 1983. *Modern Arnis: The Filipino art of stick fighting*. California: Ohara publications.
- キブイェン, F.C. 2004 「フィリピン史をつくり直す」 イレート, R.C. 『フィリピン歴史研究と植民地言説』 めこん: 304-356 (Quibuyen, F.C. 1999. "Chap.10: Remaking Philippine History." *A Nation Aborted: Rizal, American Hegemony, and Philippine Nationalism*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.: 275-302.)
- Rivera, Joma B. 2001. "The origins of traditional Silat in the Philippines". In Wiley, Mark V.(ed.) *Arnis: Reflections on the history and development of the Filipino martial arts*. Boston: Tuttle Publishing. : 15-18.
- Rozaldo, R. 1989. *Culture and Truth: The Remarking of Social Analysis*. Beacon Press.
- サイド・E・W /今沢紀子訳 1986 『オリエンタリズム』 (Said Edward W. 1978. *Orientalism*. New York: Georges Borchardt) 平凡社
- 清水展 1998 「植民地支配の歴史を超えて—未来への投企としてのナショナリズム」 西川長夫・他編 『アジアの多文化社会と国民国家』 人文書院: 148-171
- スタインバーグ, D./堀芳枝, 石井正子, 辰巳頼子訳 2000 『フィリピンの歴史・文化・社会 単一にして多様な国家』 明石書店 (Steinberg, David Joel 1994. *The Philippines : a singular and a plural place*. Westview Pr (Short Disc))
- 鈴木静夫 1997 『物語 フィリピンの歴史 「盗まれた楽園」と抵抗の500年』 中公新書
- 床呂郁哉 1999 『越境: スルー 海域世界から』 岩波書店
- Trask, H. 1991. "Natives and Anthropologies: The Colonial Struggle. " *The Contemporary Pacific* 3: 159-167.
- Wiley, Mark V. 2001a. "A history of Arnis in Manila and surrounding areas." In Wiley, Mark V.(ed.) *Arnis: Reflections on the history and development of the Filipino martial arts*. : 57-63.
- Wiley, Mark V. 2001b. "On purism and development." In Wiley, Mark V.(ed.) *Arnis: Reflections on the history and development of the Filipino martial arts*. : 31-38.
- Yambao, P. 1957. *Mga karunungan sa larong arnis*. Quezon City: U.P. Press.
- 吉岡政徳 2005 『反・ポストコロニアル人類学』 風響社

i) 本論では、日本語でのMartial Artの訳語として、格闘技術そのものを指し示す意味合いが強

い「武術」という用語が、本論の意図に合っていると考え、以降の記述は、「武術」で統一している。他の訳語の候補としては、「格闘技」「武道」などがあるが、「格闘技」は素手で攻撃や防御を行う、スポーツ競技を主に指し示す意味合いが強く、また「武道」も、一般的には明治期以降に成立した、精神修養や徳地教育の要素を含んだ格闘技術を指し示しており、こうした事情から「武術」という訳語がもっともふさわしいと考えた。もっとも、「武術」も狭義の意味では、戦国時代から江戸時代初期にかけて成立した形式や理論を指し示す場合もあるが、本論では、より広義の、体系化された格闘技術全般を指し示す意味合いで用いている。なお、これら「武道」「武術」の概念規定やその相違点については、小佐野の解説（小佐野2003）を参照した。

また、文献によっては、フィリピン武術全般を指し示す用語として、Filipino Martial Artの略称であるFMAあるいは、Filipino Combative Artの略称であるFCAを用いられることもある。

- ii) もっとも、ホブズボウムとレンジャーは全ての伝統が政治的な構築物であると結論づけているわけではない。彼らの目的は、「伝統」概念には、古くから続く「慣習」としての伝統と、新しく創造された「制度」としての伝統の2つのあり方があることを示すことであった。もっとも、こうした区分を設けたことで、誰がその分類を行うことが出来るのかという新たな問題が生じる（ホブズボウム&レンジャー 1992: p10~11）。
- iii) この表は、中村頼永氏がイノサント・アカデミーの修練体系をまとめたものを引用している。なお、この雑誌の記事中では、フィリピン武術に対して「カリ」と呼称している。これは、イノサント・アカデミーがフィリピン武術の名称としてカリ（kali）を正式な呼称として用いているためで、実質的にアーニスとの実際の意味合いの相違はほとんどない。そこで、本文では混乱を避けるために「アーニス」と表記している。
- iv) 体系は、イノサント・アカデミーを創設したダン・イノサント（D. INOSANTO）が、自らが師事した30近くの技法を整理・統合したもので、全ての実戦団体がこれらの技法を修練する訳ではない。
- v) 流派によっては、「アーニス・スティック（Arnis stick）」、「オリシ（Olisi）」などと呼称する。
- vi) 応用的な技法として「マノ・マノ（mano-mano）」と呼ばれる、素手で対戦相手を押さえ込む技もあるが、用いるのは熟練した師匠など、ごく一部の修練者に限られる。
- vii) 「モダン・アーニス」は、レミー・プレサスが創始し、現在でも彼の後継者が運営を引き継いでおり、フィリピンのみならずフィリピン国外にも数多くのトレーニング・ジムを有している。こうした意味ではアーニスの流派（school）の一つとしてモダン・アーニスを捉えることも可能だろう。しかし、現在モダン・アーニスの技法を採用している流派が数多く存在し、しかもそれぞれは基本的に独立した実践団体として活動を行っている。そのため、筆者の見解では、レミー・プレサスを頂点とし、その下に枝分かれした組織構造を想定するよりも、モダン・アーニスという技の体系（system）を個々の団体が採用していると捉えた方が実情に沿っている。そこでモダン・アーニスについては、流派（school）ではなく体系（system）

- と記している。
- viii) 古典的なアーニスの修練方法については、武術研究者であり、アーニスの修練者であるロメロ・マカパガル氏から示唆をいただいた（2005年5月2日・マニラ市トンド地区での筆者による聞き取り調査）。
- ix) こうした名称は、1986年にフィリピンスポーツ委員会（Philippine Sports Commission、PSC）」の下部組織である「アーニス・フィリピン（Arnis Philippines、略してARPI）」が制度として確立したもので、ARPIを構成する選考委員による審査、認定を経て称号が授与される。
- 選考基準には、アーニスの普及の貢献度や修練歴の長さなどがあるが、厳密に条件が定められている訳ではなく、話し合いによって決められることも多いという。
- x) Bahud Zu'buに関する情報は、団体の代表者ユーリ・ロモ氏より提供していただいた（2005年4月・バレンスエラ市、2007年8月・マニラ市、いずれも筆者による聞き取り調査）。
- xi) マニラ東部ラグナ地方を流れるルンバン川の河口付近で発見された、西暦900年頃に製造されたと推測されている銅板。1991年に国立博物館が買い取った。銅板の表面には古代ムラユ語で、当時の金銭貸借に関わる取り決めが記されていた。
- xii) カリ（kali）は、現在のアーニスの原型となる武術であると主張する文献や武術研究者は数多いが、異論もまた多い。いくつかの説によると、カリという用語自体は、近年になって何らかの人物が創作した可能性が高いという（NEPANGUE 2001: p10、DIEGO 2002: p11）。だが、カリの歴史性を認める説もあり（PRESAS 1983: 4）、結論は明らかではない。こうした議論はあるが、ここでは後の時代に発達した武術アーニスと区別して先スペイン期のフィリピン武術をカリと表記する。
- xiii) tjakaleleと呼ばれる舞踊で、現在でも村落で祝祭などの際に披露される。
- xiv) ブラジルのカポエラやベネズエラのガロッテ・ラレンス（garrote larense）などの武術にも、植民地期における実践禁止と舞踊との結びつきという、アーニスに類似した伝承が存在する。またアンチオーブはカリブ海の黒人奴隷達の武闘ダンスを紹介しているが、その描写や時代背景がアーニスと極めて類似している点が興味深い（アンチオーブ 2001: p183~185）。
- xv) アーニスはセブ島周辺などでは「エスクリマ（Escrima）」という名称で呼ばれることがある。これは、スペイン語で武器を用いた争いを指す“Esgrima”から派生した用語と考えられている。
- xvi) ホセ・リサル（JOSE P. RIZAL）：フィリピン革命に思想的に大きな影響を与えた文筆家、医者、革命家。今もなお国民的英雄としてフィリピンの人々の思慕を集めている。スペイン植民政府はフィリピン革命が勃発した1896年12月に、革命を扇動したという根拠のない罪状に基づいて彼を処刑した。
- xvii) 現在使われている「フィリピン人」という集団概念は、こうした19世紀の民族主義運動の中で生み出された、極めて新しい民族概念であると言える。それまでのフィリピン人とは、フィリピン生まれのスペイン人を指し、必ずしも現在のフィリピンを出生地とする人々全て

を指す言葉ではなかった（清水 1998: p152）。

xviii) 『格闘Kマガジン 2002年2月号』 ぴいぷる社 「「カリ」とは何か？」:p10より引用

xix) フィリピンが、国民国家として成立するはるか以前のラプラブを、彼の民族的出自を脱色した上で「国民的英雄」とする語りには、現在でいうフィリピン群島の起源や歴史の操作が加わっていることは考慮すべきだろう（アンダーソン 1997: p332～335, 床呂 1999: p109）。

xx) アメリカに依存して達成したフィリピン独立について、民族主義者レクトは「これは分離独立というよりは、より完全な統合であった」と皮肉混じりに指摘している（キブイェン 2004: P346）

xxi) 歴史学の分野では、リサーチが取り組んだフィリピン民衆の視点に基づいたフィリピン史の見直しの試みは、歴史家アゴンシリョに引き継がれた（AGONCILLO 1956）。こうしたフィリピン史を巡る動きは、後に革命の英雄ボニファシオの人物像を否定するアメリカの歴史家グレン・メイ（MAY, G. A.）の挑戦を受ける（MAY 1997）。しかし、イレートを中心とする若い歴史家らはメイの議論に猛然と反論し、「メイ-イレート論争」と呼ばれる議論に発展した（ILETO 1998）。この論争は、従来のフィリピン史観には、かつての植民地宗主国であった米国による、植民地支配を正当化する思惑が大きく反映していたことを明らかにした。そしてイレートラフィリピン人研究者による新たな歴史観の再構築の試みは、旧宗主国の文化的な呪縛を解き放とうとするポストコロニアル的な展開として捉えることができる（CORPUZ 1989）

xxii) ドセ・パレスの歴史や現在の活動状況については、この団体の公式ホームページ “Doce Pares International” <http://www.docepareinternational.com/>を参照した。

xxiii) 例えばヨーヨーは、世界で愛好者の多いゲームだが、もともとは、フィリピンの狩猟採集民が狩りのために用いた道具だとされている。

xxiv) “BUREAU OF PHYSICAL EDUCATION AND SCHOOL SPORTS”

http://www.deped.gov.ph/about_deped/organizationlinks.asp?id=14

xxv) 「日刊まにら新聞」澤田公伸氏からの情報提供による。

xxvi) “Factsheet (as of August 31, 2006) - Basic Education Statistics” Department of Education, <http://www.deped.gov.ph/public/public.asp?sec=>

xxvii) <http://www.angelfire.com/games4/pigssai/dionlapulapu.gif>

xxviii) 池端は、スペインからフィリピンにもたらされたカトリックの意味世界が、植民地支配に抵抗するための行為を正当化する枠組みを提供したと分析した。そしてこうしたカトリックの意味合いの変化を、「カトリックの逆説的位相」と呼んでいる（池端 1987: p251～257）。